

[成果情報名]炭疽病による汚斑状斑点を有するイチゴ「さちのか」苗は廃棄が必要である

[要約]炭疽病により葉面に汚斑状斑点を有するイチゴ「さちのか」苗は、外観健全苗に比べて病勢進展の危険性が高く、2次伝染を防ぐためにも廃棄が必要である。また、本圃定植後も萎凋枯死しやすいので、定植苗としても不適である。

[キーワード]イチゴ, さちのか, 苗, 炭疽病, 汚斑状斑点

[担当]農林技術開発センター・環境研究部門・病害虫研究室

[連絡先](代表)0957-26-3330

[区分]野菜(生産環境)

[分類]指導

[背景・ねらい]

イチゴ品種「さちのか」は、従来品種と比べ炭疽病に極めて弱く、健苗育成のためには、炭疽病対策が重要である。本病の初期病徴の一つである汚斑状斑点(写真1)を葉に有する苗(汚斑苗)は、クラウン部への本菌分生子の飛散確率が高く、萎凋枯死などへ病勢が進展する危険性が高いという推測から、これまで廃棄指導を行っているが、裏づけとなるデータがない。そこで、育苗期と本圃期において汚斑苗の病勢進展を調査し、廃棄の必要性の有無を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. イチゴ品種「さちのか」において、育苗期の炭疽病による汚斑苗は、外観健全苗と比べ防除の有無に関わりなく、葉柄の陥没や株の萎凋枯死へ進展する率が高い(図1)。また、葉柄の陥没症状部分には、大量の本菌分生子を形成する(データ略)。
2. 本圃定植時の汚斑苗は、外観健全苗と比べその後の萎凋枯死株率が高い(図2)。
3. 以上のことから、「さちのか」の汚斑苗は、萎凋枯死等への病勢進展の危険性が高く、2次伝染源にもなるため、育苗床からの廃棄が必要であり、また、本圃定植苗としても不適である。

[成果の活用面・留意点]

1. 汚斑苗の廃棄は、圃場周辺に廃棄や放置をせず、適正に処分する。
2. 育苗は、細霧スプリンクラーによる頭上かん水および高設棚の試験である。
3. 汚斑苗周辺の外観健全苗の廃棄範囲についても重要な問題であり、今後検討する必要がある。

[具体的データ]

耕種概要



写真1 イチゴ葉上の汚斑状斑点

供試品種：さちのか
 育苗期試験；
 作型：ポット育苗（高設棚），親株除去（ランナー切離し）：6月23日，その他：苗区分における防除区は10日ごとに殺菌剤を散布した。
 かん水方法：細霧スプリンクラーによる頭上かん水、30分×2回/日本圃期試験；
 作型：促成栽培（長崎型高設栽培），定植：2008年10月3日，地中加温：17℃，加温：ハウス加温期機による加温（最低気温8℃），電照：なし，その他：降雨による周辺への感染を防ぐため定植直後から雨よけでの栽培とし、11月中旬より慣行の被覆を行った。

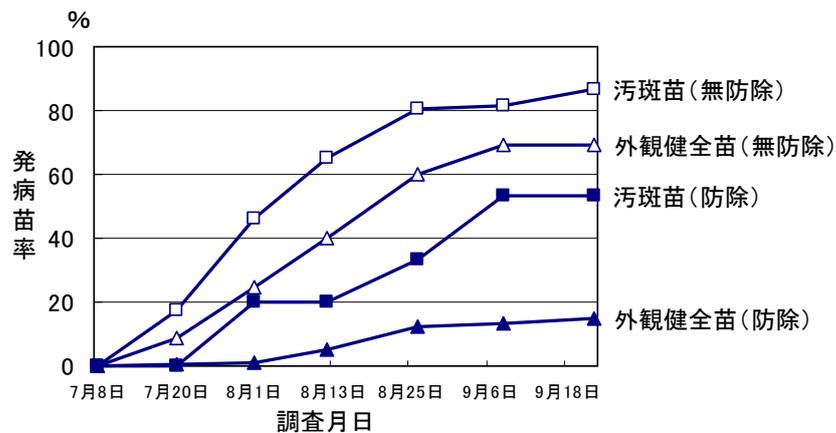


図1 育苗期における炭疽病汚斑状斑点および防除の有無での病勢進展
 汚斑苗：上位3複葉当り1～5個の汚斑状斑点のみを有する苗（7月8日時点）。
 発病苗：葉柄に陥没病斑および萎凋枯死症状を認めるもの。発病苗率は累積値。
 防除は9反復、無防除は3反復とし、反復内で汚斑苗と外観健全苗をランダムに配置。

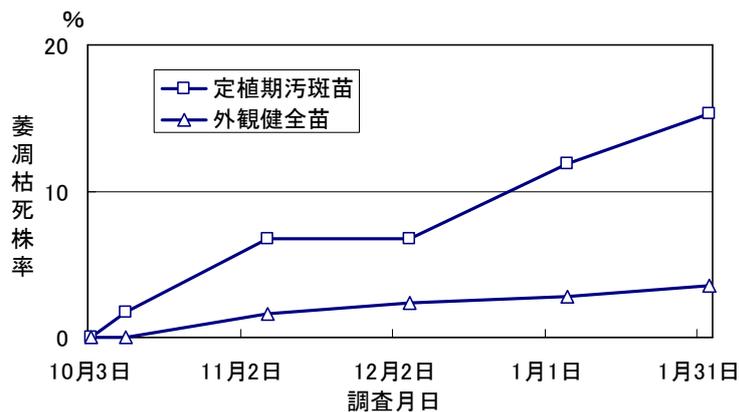


図2 本圃定植時における炭疽病汚斑状斑点の有無での病勢進展
 汚斑苗：図1に同じ（10月2日時点）。萎凋枯死株率は累積値。

[その他]

研究課題名：イチゴ「さちのか」難防除病害虫の制御技術確立
 予算区分：県単
 研究期間：2008～2010年度
 研究担当者：内川敬介、難波信行